

アーテー論の展望

—メモランダム—

志田 信男

何年前のことだろうか。もうかれこれ45年にもなろうか。多分修士課程在学中のことである。高津春繁先生の講読の時間—ホメーロスだったか、アイスキュロスだったか、—とつぜん先生が私に尋ねた。「志田君、アーテー (ἄτη, ἄτη) というのは何だと思う？」私はとっさに迷妄・狂気のような返答を思い浮かべたが、実は深く考えたこともなかったの、先生の質問の真意が分からず、一瞬返事に詰まったのを覚えている。もちろん先生は、とおりの一辺の辞書的な答えを求められたのではなく、もっと本質的な問いを発せられたのである。その後何十年もこの問いは、頭の片隅にあったが、つきつめて考えたことはなかった。ところが最近になって、何時の頃からか、このギリシア神話の中では、最下位の negative な神の本質は、実はもっと違うところにあるのではないか、ことによるとゼウスによって天上を放逐されて人間界に浮遊し、人間にとりついて破滅的な行為に走らせる、というこの女神（もしくは人間の行動因としての憑依現象の主体）は、人間存在にとって深い意味をもった、時にきわめてダイナミックな、positive な「存在」の形象化ではないのか、という考えが浮かんだのである。

ギリシア七賢の一人クレオブーロスのことばに、μέτρον ἄριστον（中庸こそベスト）という名句がある。中庸はギリシア人にとって最高の徳目の一つであった。ヒポクラテースに代表される古代ギリシア医学も中庸を基本とする養生や食事療法による自然治癒力の活性化による治病・健康維持を原則としている。この中庸の美德を保証するのが、σωφροσύνη といわれる精神の活動である。このことはギリシア宗教思想にもあらわれている。古代ギリシア人は、ゼウスを筆頭とするオリュンポス 12 神をはじめとして、多くの神々を尊崇した。そしておそらく各人は、ゼウスはもちろんであるが、それぞれ特別に帰依する神をもっていた。ちょうど日本人の佛教徒が釈迦如来をはじめとするもろもろの佛た

ちを信仰する一方で、特に観世音菩薩の信者であったり、不動明王の信者であったりするようにである。ディオニューソスの信者、アルテミスの信者、アポローンの、そしてアスクレーピオスの信者といった具合にである。がギリシアの場合、特定の神への偏愛・過度の帰依は、それと対極にある神の怒りを買う。アルテミスの信者ヒッポリュトスは、愛の女神（彼に対する場合は、理不尽な不貞にいざなう女神）アプロディーテーの怒りと罰を受ける。ディオニューソス神を否定するペンテウスは、自らの母親アガウエによって八つ裂きにされる。純潔という徳目さえも過ぎれば、hybris となり、神による nemesis を引き受けさせられるのである。同様に飲酒と禁酒についても同じである。不死なる (ἀθάνατος) 神々との関係において死すべき (βρότος) 人間は、それぞれある特定の神に対する信仰・帰依・偏愛を抱くことがあっても、あくまでも人間としての分を超えない一定の限界内においてである。人はここでも関係の中庸を要求される。人々が安住できるのは、神々との間のある種の均衡・中庸の内においてである。特定の神を名指しで非難し否定することなどもっての他である。このようにして、神々と人間との間に成立する安定・平穩無事というのとは、ことばを変えれば、慣れ合いにおける均衡・バランスの維持ということにならないだろうか。「触らぬ神に祟りなし」というのは日本人の常民の宗教生活の、ある意味で根っこにある態度なのである。まず神社に参拝し、ついでに途中寺院に寄って佛像に礼拝するという人々は今でも少なくないだろう。古代ギリシア人の宗教感覚も常民の間では、日本人に通底するものがあつたのではなかろうか。このような神々との間に成立するバランスの感覚もまた一つの中庸の状態といえるであろう。がここで視点を変えて考えてみると、「中庸」という徳目をことさらあげつらうということは、実際にはこれを守ることが往々にして困難だったことを示している。「殺すな」という格律は「殺す」人間がいるということをも前提にしている。ギリシア人の σωφροσύνη は、おそらくこのような信仰上、処世上、保健上の中庸を守ろうとする人間の精神的能力・機能をいうのであろう。

さて思慮のある人々の中庸によって保たれる、平和で調和のあるバランスのとれた生活は、それ自体は望ましいものであるにしても、そこでは時間と歴史は静止し、停滞した息苦しい平穩無事の日常は人々の創造性を枯渇させ、精神の鬱屈を生み出すことはないだろうか。人間は時に「切れる」ことがある。妄想にとりつかれて己れを失い、とんでもない行動をとることがある。「かくすればかくなるものと知りながら」という一念にとりつかれて求めて破滅の道を

歩むことがある。ギリシア宗教思想においてアーテーは人間が襲われる理不尽で非理性的・非妥協的感情意欲の他力的な動力因（行動因）として現れる。呉茂一先生によれば、

またこの「争い」エリスからして、「忘却」や「飢餓」、苦しみの多い「労苦」ponos、涙にみちたさまざまな「苦痛」たち、「戦さ」に「戦闘」に「殺戮」phonos、「人殺し」、「闘争」たち、「嘘言」、論争、不法、「破滅」Ate、および「誓言」Horkosなど一連の、人性の悪に根ざすと思われるもの悉く夜の子で、ことにアーテー（破滅、人心の迷妄、それに基づく過誤から破滅に至る）は、ギリシアの倫理思想に著しい役割をつとめ、詩歌にもしばしば歌われる恐ろしい女神である。」

ここでもアーテーは恐ろしい negative な神である。が、それだけだろうか。呉先生が述べている「夜の子」たちの内、「争い」「忘却」「労苦」「戦さ」「論争」「誓言」などにしても否定的側面だけでなく、positive な解釈も成り立つのではないか。「論争」も「争い」も時に社会内の対立を止揚していくための前提となろうし、「労苦」は、「苦難によりて学ぶ」（πάθει μάθος）(Agam. 177) というアイスキュロスに示された「ゼウスの掟」(Agam. 160ff.)に通ずるものである。私たち日本人も「艱難汝を玉にす」という珠玉の格言をもっている。アーテーとて同じである。古典学者にして精神医であるベネット・サイモンは、ホメロスの叙事詩を精神医学の立場から次のように考察している。

これまでわれわれは、人間の心の不安や悲しみを解決するためには、一体何が必要なのかを示すためにホメロスが作品の中で展開させた、錯綜した人間模様を概観してきた。心の不安を解消するには行動だけでは足りないし、情動の放出によっても十分な解決は得られない。人間性と人間の死すべき本性のいずれをも、互いに共有しているという事実を受け容れることができはじめて、治療的な効果が期待できるのである。はじめに、プリアモスとアキレスの哀悼の情は、時間的には同時に、しかしそれぞれ別個のものとして生じた。ところが、この二人が互いに共感し合うようになると、互いをより親密なものと感じて、皮相な憐れみ以上のものを感じはじめるようになる。最後には、「アキレスの怒り」と呼ばれる病いと「プリアモスの癒し難い悲しみ」のいずれもが、互いに相手の立場に立つことが可能であるという認識

ばかりでなく、それぞれが自らのうちに、すべての人間的要素、すなわち、男性と女性、父親と母親、親と子、姉妹と兄弟、友人と敵、動物と人間などを共有しているという深い認識によってはじめて、ある種の解決へともたらされるのである。

ホメロスの叙事詩のなかから取り出しうる、治療的な要素の本質とも言える側面を要約してみると次のようになる。

(1)それは人間の外部からもたらされる。

(2)それは神的要素を内に含むか、もしくはそうした要素を介してもたらされる。

(3)それは現に生きている人々、祖先、子孫から成る集団のなかで当の個人が占めている位置と深くかかわっている。

(4)心の病いは、英雄と彼の属している社会の秩序との間の軋轢を反映している。英雄はまた、他の人々が属している社会の均衡状態を破壊する。

(5)作中劇を通して、心の障害は多くの場合、より大きな社会的秩序という観点をとり入れることによって理解しうるものになるということが示される。

(6)治療は、社会的に通用しているモデルによってもたらされ、どのような苦悩や絶望を取り扱う手段にもすべて先例がある。

(7)治療の過程では、他の人々や神々による支援や介入ばかりでなく、徹底操作過程が重要な役割を果たす。この徹底操作の過程で、心を病んでいる者は、それまで利用することができず、その価値さえも知らなかったさまざまな内的な自己同一性を経験したり、自分自身の諸要素と触れ合ったりするようになる。

以上要約したもののうちいくつかは、叙事詩を実際に聞いた（もしくは読んだ）観客の経験に対してもそのままあてはまるだろうし、観客のなかの個人、もしくはひとつの集団としての観客が、こうした物語を通して自らの緊張や苦悩から救われたであろうことは容易に推測できるのである。²⁾

この「要約」の(4)(5)が問題である。「心の病」の一つにアーテーを置いてみれば、アーテーの出現の場・状況が分かるのである。「英雄はまた、他の人々が属している社会の均衡状態を破壊する。」「心の障害（アーテーも当然含まれる一筆者）は多くの場合、より大きな社会的秩序という観点をとり入れることによって理解しうるものになる」というのは優れた考察だと思ふ。あらゆる画期的な改革・革新・革命・飛躍・進歩はある意味で「社会の均衡状態を破壊

する」ことに始まる、からである。アーテーは、英雄をつき動かしてこのような positive な方向に向かわせる、あるいは positive な成果を生じさせる原動力となることがあるのではないか。その結果多くの場合、英雄は破滅し悲運をたどる。彼は moira を逸脱し、己れの尺度（メトロン）を超えたが故にエリーニュスによって、アーテーを分配されるのである。ドッツの『ギリシャ人と非理性』によれば、この「モイラーエリーニュス—アーテーという複合観念は深い根を持つように見える³⁾」のである。ドッツはこの本の中で詳細なアーテー論を展開しているが、第二章「恥の文化から罪の文化へ」の末尾で『アンティゴネー』の次の一節を引用し、

また、このアルカイク的な罪の文化から、人類が産み出した最も深い悲劇詩の中のいくつかが生じたのだ、ということをおぼえてはならない。そのような詩を産み出した詩人は、とりわけ、アルカイク的世界観の最後の偉大な代表者であるソフォクレスであった。彼は、古い宗教的な題材のもっている悲劇的な意味を、そういう題材のもともとの形である道徳化されていない残酷な形式の中で、あますところなく展開したのである。——それは、神の神秘に直面した人間の無力さ、また、あらゆる人間の功業を待ちうけているアーテー（狂気、破滅）についての圧倒的な感覚である——そうして、ソフォクレスが、これらの思想をヨーロッパ人の文化遺産の一部となしたのであった。『アンチゴネー』から叙情的な一節を引用することにより、本書を閉じさせていただきたい。この一節は、私などの言葉より遙かに見事に、古い信仰の美と恐怖を伝えているのだから。⁴⁾

と述べている。アーテーについての当面の議論のための有力な示唆があるので以下に全文引用してみよう(Anf. 583 ff.)。なお、アーテーと恥の文化・罪の文化については、小文では論じない。

悲惨を味わうことなく、生涯をすごす人こそ、^{しあわせ}幸運。

ひとたび、神が或る家をゆるがすや、

なべての^{アーテー}狂気が、その家を襲い、

その^{ちすじ}血統の多くの末にまで憑きまとうゆえ。

その様は、あたかも、

海原をかけるトラキア^{おろし}嵐の烈風により、

猛りたつ大波が、海の暗い深みの上を疾駆し、
海底から暗黒の砂粒を巻き上げてくるよう。
また、逆風と逆浪に撃たれる浜辺が、
呻きを発して、咆哮するよう。

目のあたりにしている光景は、
大昔からのラブダコス家の苦しみ。
それが今あらたに現れて、
死者たちの苦しみの上に落ち重なってゆく。
この一族のどの世代も、
この一族を呪われた苦しみから解き放つことがない。
この一族は、神々のいず方かによりて、
ひき裂かれていくにちがいない。
救いがない、この一族には。
今しも、オイディプスの館の中で、
一族の最後の根の上に、光が射したと見えたのだが、
それも束の間、
地獄の神々の血塗られた鎌と、
狂愚の言葉と、
胸底深くにひそむエリーニユスとが、
この光を、刈り倒してしまったのだ。

ああ、ゼウスよ、そも、人間のいかなる傲慢が、
汝の御力を、抑え得ることがありましょう。
万物を誘い捕える眠りも、
神々のしろしめす、疲れを知らぬ四季のめぐりも、
汝の御力を取り除くことはできません。
時とともに老いることなき汝は、
王として、オリュムポスの輝く峯に、在します。
近き未来、遠き未来、さらには過去を、
支配するのは次の掟。
破滅をとまなわずして、あまりの偉大さが、
死すべき者の生を訪れることなし、と。

涯しなくさ迷い歩く^{ヒュブリス}希望は、
多くの人々にとっての慰め、
だが、また、多くの人々にとっては、
軽はずみな欲望^{エロス}のもたらす欺きに他ならぬ。
熱い火に足を踏み入れる前には、
心^{めし}盲いた人間に、欺きがつきまとう。
その有様は、大昔の或る賢者によって残された、
名高い諺に示されている通り。

神が人の心を^{アーテー}狂気へとみちびけば、
その者の眼には、
悪がいつしか善に見えてくる。
かかる者が、^{アーテー}破滅を免れて生きる時の間は、
ごくわずかにすぎないのだ。

「「破滅」(アーテー)をとみなわずして、あまりの偉大さが、／死すべき者の生を訪れることなし、と。」(Ant. 613-614)⁵⁾ はまさに英雄の運命を指している。また最終句の「神が人の心を狂気へとみちびけば、その者の眼には、悪がいつしか善に見えてくる。」は既成の秩序や道徳の改革者を旧体制の側からみたテーゼといえるだろう。こうして見る者の立つ視座、立脚点を変えることによって、アーテーの negative な性格は、positive な変革の原動力へと転化しうるのはないだろうか。プロメーテウスは天上から火を盗んで人間に与えたが、この行為は人間の立場からすれば、文化英雄としてのプロメーテウスへの感謝と尊崇を喚起されるものであるが、神々の立場からすれば、プロメーテウスは分限を超えて破滅への径をひたすらに急ぐ狂者でしかないのである。これが私のアーテー論の perspective である。

ちなみに現代詩人 G・セフェリスは、独立戦争時の将軍で「回顧録」で知られるマクリヤニスを論じた文章の中で、〈何人であれ、尺度を超えるものは、ヒュブリスの罪を犯すものであり、ヒュブリスは人々に襲いかかる最悪のもの〉であることを述べ、〈宇宙〉のバランスと平衡のために予防手段をとる峻厳な〈運命〉こそ〈アーテー〉であると独自のアーテー論を展開している⁶⁾。ここでセフェリスはもちろん伝統的なアーテー観に立っているのであるが、これを〈宇宙〉のバランスと平衡のための〈予防手段〉をとるものとして、既存

の秩序維持のためとはいえ、単に negative な狂気・迷妄のようなものとしてではなく、positive な評価を与えていることに注目すべきであろう。

E・R・ドッズ、B・サイモン、H・ロイドジョーンズなどアーテー論を展開している学者は多い。また多くの evidence も残っている。今後これらの資料の exhaustive な検証によって、古代ギリシアの宗教・倫理思想におけるアーテーの本質をさらに明らかにしていきたい、と考えている。小文はそのプロロゴスにあたるものである。

註

- 1) 『ギリシア神話(上)』呉茂一著、新潮社 1951, p.29.
- 2) 『ギリシア文明と狂気』ベネット・サイモン著、石渡隆司/藤原博/酒井明夫訳、人文書院、1989, pp. 64-65.
- 3) 『ギリシヤ人と非理性』ドッズ、岩田靖夫・水野一訳、みすず書房、1972, p.10.
- 4) ドッズ上掲書 pp.50-62.
- 5) この部分の読みはいくつかあり、ドッズの訳者(岩田靖夫・水野一)氏の「あまりの偉大さ」が適訳かどうかは検討の余地がある。R. Pignarre (ガルニエ古典叢書)は 'l'extrême du bonheur'、英訳(ロエブ古典叢書)は 'great wealth'、柳沼重剛(ギリシア悲劇全集 3、岩波書店)は「過ぎたるは ...」、呉茂一(ギリシア悲劇全集Ⅱ、人文書院)は「勢い傲り榮えれば」とそれぞれ訳している。いずれも分限を超えたものは「アーテー」を免れないの意に解している。もっとも、W. Willige (トウスクルム古典叢書)は 'nichts ... jahrelang frei von Urteil' として、より一般化した解釈を示しているが、πάμπολις, πάμπολυς のいずれをとるにせよ、語感上、筆者はこの説はとらない。とすれば、このような過度の状態に落ち入ることができるのは常人ではなく、英雄、権力者、支配者であろう。その意味では、「英雄の運命」と解せるかも知れない。むしろ、「過度」に対する死すべき人間全体に対する一般的な戒めを当然のことに前提として含意している。この場合の「過度」には、正の場合も負の場合もありうるわけである。Cf. F. Ellendt *Lexicon Sophocleum* s.v., Liddell & Scott, *A Greek - English Lexicon*, s.v. etc.
- 6) 『セフェリス詩集』土曜美術社、1988, pp. 154-155.

参考文献

引用文献については小文中及び註に明記した。一般文献については、現在蒐集・整理中なので、今回は割愛する。